

7. 活動報告

(1) 関西大学佐治スタジオ

「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」

関西大学 TAFS 佐治スタジオ 研究員 出町 慎

よろしくお願いします。関西大学佐治スタジオの出町です。

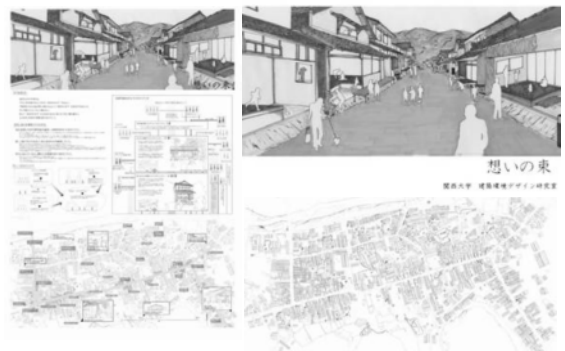
今日は、僕たちが2006年から丹波市で活動してきたことを発表したいと思います。

この写真は、僕らが活動の拠点としている青垣町佐治を山の上から見た写真で、いつもこのような風景を意識しながら活動しております。

(参照：パワーポイント資料...60頁)



これは2006年、先ほども紹介がありましたが日本建築学会近畿支部の120周年記念事業のときに、研究室の学生8人くらいと一緒に考えて提案した内容です。



これがきっかけになり研究室の活動が始まったわけですが、その後、空き家を借りて「佐治スタジオ」を開設し、丹波市と関西大学の連携協定を結んでいただき、国の補助金をもらいながら活動を展開してきました。

僕たちの活動は「関わり続ける定住のカタチ」「21世紀の故郷づくり」の2つをテーマにして、学生が継続的に卒業してもずっと丹波の地域に関わり続けていけるような環境を作っていこうと取り組んでいます。

「関わり続ける」ということで、地域の課題や魅力といったいろんなことを理解して、活動を展開していくことがすごく重要だと思っています。僕らだけでなく地元の方々と一緒に、専門家の人達を巻き込んでずっと考え続けるということが非常に大切だという考えのもと、活動しています。

まず最初に僕たちは、関わり続けるという環境を作ることが重要なのではないかと考え、空き家を 地域・佐治の町・丹波市を含めて非常に空き家が増えてきておりますが、そういった空き家を活用して、僕たち学生が調査や地域との交流といった活動をするための拠点を作ることから始めました。「空き家リノベーション」ということで、今現在2軒の空き家の改修が終わっています。



これは大正時代の頃の佐治の写真です。このような、地域の方々や町の中でワイワイ過ごしているような景観・暮らしの風景といったものをもう一回地域の中で作っていくにはどんなことが必要なのかを

考えながら、リノベーションを進めていきました。

今の佐治はこんな感じです。

車が停まっていますね。車はたくさん見るのですが人を見ない。お店があったとしても人がいなかったり閉まっていたりという状況で、町と建物と人の暮らしがバラバラになっているなという感じがします。こういったものをどうやって連続させていくのか。いい景観、人が暮らしていて常に人の気配がある、暮らしていて楽しいという豊かな景観を作っていくにはどうしたらいいか。そういうテーマを



掲げながら、学生たちが主体になり、簡単にできる方法、豊富な木材などの地域の資源を活用しながらやっていく方法でのリノベーションを考えています。また、まちの居場所づくりなどいろいろなテーマを掲げてやっています。

建物の改修ですので、一戸の建物を改修することが目的ではなく、それを通じて佐治・青垣・丹波といったもっと大きな地域環境をどのようにデザインしていくのかということがすごく重要だと思っています。

これは佐治スタジオの改修です。簡単に流していきませんが、これが改修前です。

宿場町ですので、道にパチッと面しているのですが、これがなかなかまちと接点がないような造りでした。普通の築80年くらいの民家なのですが、僕らがイメージしているような、大正時代の景観を作っていたような建物でした。



こういう、新建材とか後からつけたものをまず元に戻していこうということで、学生たちと解体を始めました。

壊していくとどんどん元の姿が見えてくるということで、こういったかたちが良いのではないかとということで進めていきました。

こういう感じで学生が主体的となって改修しています。

地元の材木は大工さんたちに支援してもらいながらやっていくわけですが、僕らだけでやるのではなく地元の人たちと協議・交流を図りながら、地域は一体こういったことを求めているのか、僕らがやるうとしていることはこういうことなんだよ、といろいろな意見交換をしながら進めていきました。



構造補強に地元の木材を使ったり分厚い木を使ってみたりして、いろいろなかたちで地域の木材を評価していくということが重要だと思ったので、意識的にやっています。

これは改修後なのですが、このように道に面したところに通り土間を付けたりパーカウンターを入れたりなど、道に接するところ、すぐ外から見えるところに人の活動する場所をもってこようということでこうしています。

学生にとっての場所だけではなく、地域の人たちにとっても地域の人たち同士が交流する場所が今すごく減っていて、そういう場所を作る必要があるということを地域の人と話しながらすごく感じていたので、学生や自分にとっての居場所

を作ろうということで、様々に活用しています。

そういった拠点をまず設けたことによって、いろんな授業や活動が展開されていきました。

例えば、「地域再生」と言って2泊3日泊まりながら、滞在型でいろんなテーマで授業を展開したり、「ワークキャンプ」といって、一週間実際に町の中に滞在して、製材業や農業とかあるんですが、生業ですね。今日、この後でパネルディスカッションにも出られますイクジウツの社長さんにお世話になったり、丹波のことを身体を使って、頭で考えるのではなく身体で感じることを重視した滞在型授業を毎年長期休みのときにやっています。

それ以外にも、先ほどの二つの授業は大学の単位科目にもなっているのですが、それとは別に、定期的に学生が丹波来て、丹波のいろいろなことを知ろう、交流をしようと、あちこちに行って活動しています。



今年の秋には柏原の「柏原スタジオ」にもお世話になりましたし、伝統的なお祭りにも参加したりしています。

そんなことをしながら拠点を設けて活動を展開していくのですが、昨年の2月頃に2軒目の改修が完成しました。こんな感じです。

1軒目と同じように新建材が張られていて、非常に道と連続しているような構えを持っているのですが、上手くそれが使われていないということがあったので、これをどう活用しようかと一緒に考えながら進めていきました。

地元の木材を使って構造補強や分厚い木材を使って熱環境を整えたり、空き家・建物が持っている課題を解決していくということがありました。



これからですが、空き家を改修はしていくのですが、いかに活用してどうやって良い景観を作っていくのかという仕組みづくりが重要なのではないかと考えています。氷上西高校の生徒と一緒に空き家を活用することをやったり、大学生と高校生が一緒になって写真ギャラリーを作ったりしています。

佐治の町中にある「土田うどん」という伝統的な食べ物をみんなで復活したり、機械を整備するところから始めることを一緒になってドロドロになりながらやっています。

今年から、地域の人たちが空き家を使った「丹波布の里まつり」という祭りをやっています。そこに一緒に出店したりして、景観づくりに貢献できたらいいなと思って一緒にやっています。

また、今年からは隣の春日町の氷上高校と一緒に空き家を活用できないかということで、野菜販売を考えています。

このような感じで、地域の人たち・高校生、せっかく若い人がたくさんいるので、そういう接点をいかに作っていくかを仕組みとして一緒に考えているのですが、最近始まったばかりです。

さらに、昨年あたりから氷上町成松というところにもお世話になっています。氷上町のみなさまはご存知のとおり「愛

宿祭り」というものがありますが、その愛宕祭りで毎年やっている「造り物」を学生が入って一緒に造っていくということをやりました。

造り物は地元の人が造っているものですが、学生がどういったところでどういったかたちで関わっていくといいのかを考えるところから始まっています。

「愛宕祭りコンペティション」というものを企画し、造り物を学生の中から募集してその中から優れたもの・面白いものを地元の人と講評する。面白いと思ったものを一緒に造ろうということでやっていきました。地元の人たちの前で公開審査会をして、専門の方に審査員で来ていただきました。こういうコンペの実行委員会も学生たちが中心となってやっています。



成松の方がおられたらよくご存知だと思うのですが、実際造り物をどうやって造るのかということと一緒に考えていきました。製作合宿、1週間泊り込みで合宿して造り物を造ったのですが、今回は「山」をイメージして、丹波の山並みを造り物で表現できないか、しかも地元の木材、端材一式で作ろうということでやりました。子供たちが木に触れる機会を作る、町の中では木の香りが漂うのですが、そういった地元のいい魅力をもう一度体で感じられるようにということです。

さらに今、「佐治倶楽部」と言いまして、空き家を実際に地元の人たちと一緒に使っていき、仕組みを佐治で考えています。

僕らは2軒空き家を改修しているのですが、僕たちだけで使っていくのではなくて、地元の人・都会の人・卒業生などいろんな人たちと一緒に使っていき、ことが重要なのではないかと考えて始めます。

地元の人にとって何かお店を使ったり空き家を活用することはいろいろハードルが高いのですが、そういったことをみんなできでシェアする。月1回ならできるという人が30人集まれば毎日空き家は活用されるわけですし、単純な話ですがそのような感じでいるんな人に空き家を使ってもらい、常に町の中に人が暮らしているような景観を作っていけないか。そういったことを考えて今、来年の1月にはスタートできるように準備しております。

こんな実験もやりながら、こういった集い、ダイニングや交流会をやったりしております。

今はお花屋さんを定期的にやっており、神戸のガーデナーの方に来ていただいています。このようなかたちでまちなみ・まちの中の空き家を活用して緑を増やしていく、そして地域の人たちが集まれる居場所を作ろうということです。

地域の木材を使って一緒に地元の製材所、足立さんと一緒に家具を作ったり、レイアウトを一緒に考えたりということもやっています。



また、「丹波コミュニティ・ツーリズム」という、従来あるようなツアーではなく、もっと暮らしの豊かさをたいなことを支援できないかということで、新しい観光ツアーに関する取り組みを始めています。

川でただ一日のんびりすることができないか、山で間伐整備のお手伝いができないか。以前、佐治で大人の社会見学をしたのですが、そんな風に丹波の暮らしの豊かさや美しい景観みたいなことを感じてもらえるようなツアーをしていきたいと思い、社会実験をしているところです。

最後に、このようなかたちでいろいろな空き家の活用や景観を作っていく仕組みがこれからは重要だと思っていて、4大学が関わっていますが、連携の仕方と言いますか、どういったことができるのかなと僕自身がワクワクしています。

できたらいいなと思っているところにスタジオ交流があり、地域の側で様々ありますが、僕ら関西大学だけで佐治のことを考えるのではなくて4大学のみなさんと一緒に佐治のことを考えると、この前「山南スタジオ」にお邪魔したのですが、そういったところに僕らも行って何か一緒にやるとか、地域の場をみんなで共有して一緒に考える仕組みづくりが重要じゃないかと思います。

そうすれば、常にスタジオが開いているという状況をみんなで作れるのではないかと思うし、人材が限られていますのでそういったところでシェアしていくことによって、常にいろんな動きが丹波市の中で起こればいいなと思っています。

先ほどの成松の造り物ですが、2011年もやりますので、そういったところで4大学のみなさんと一緒になって参加できると面白い展開になるかなと思っています。

何ができるのかをみんなで一緒に考えるところから始めるといいなと、今回のシンポジウムがそういうきっかけになればいいなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

(2)関西学院大学柏原スタジオ

「地域で学ぶ・地域と学ぶまちづくり」

関西学院大学大学院 修士課程 北出 悟士

こんにちは。関西学院大学大学院総合政策研究科修士課程1年生の北出と申します。

本日は、関西学院大学が柏原で昨年からはじめた活動の報告をさせていただきたいと思います。

(参照：パワーポイント資料...74頁)

はじめに、私たちが柏原の地域でフィールドワークを始めたきっかけについて説明します。

平成21年3月に「丹波市中心市街地活性化基本計画」が国の認定を受けました。

この基本計画を支援するために、「織田まつり」や商店街を活性化させるために学生による提案をしていくために、覚書を株式会社まちづくり柏原と締結し、平成21年4月から都市政策演習という授業の一環として柏原のフィールドワークが始まりました。

4月	5月	6月	7月	8月
第一回現地 フィールドワー ク	第二回現地 フィールド ワーク 4月調査の分析	第三回現地 フィールド ワーク まちなみ調査 建築物形状調 査	第四回現地 フィールド ワーク ワークショップ 準備 建築物形状調 査	夏祭りに参加 高校生とワー ク ショップ 模型制作開始 建築物形状調 査
株式会社まちづ くり柏原社長 荻野さんによる 講義 観光協会会長 松下さんによる 講義	県民局の方 による講義 SWOT分析		4回生卒業論 文開始	ワークショップ 結果分析

2009年の前期、4月から9月までの年表です。

4月から5月は、初めて柏原のまち歩きをすることになったので、柏原のまちを知ろうとまち歩きをして、その次の週に学生同士で柏原のまちを分析しました。

写真は上がまち歩き、下がみんなで分析をしているところです。

その分析に使ったのが「SWOT分析」で、「まちの強み」「まちの弱み」、「まちの機会」「まちの脅威」(外部環境)というものの4つに分けました。

「まちの強み」としてはコンパクトであること、「まちの弱み」はミニ開発が目立つこと、「まちの機会」つまり外的要因としては最近歴史ブームであること、「まちの脅威」は、柏原にとって嫌なこととして先ほどもお話がありましたが、少子高齢化、不景気で観光客がなかなか来ないということがあります。



その分析を踏まえて学生独自に問題点を整理しました。右にあるのは問題点や課題から出た学生の意見で、他にも出たんですが、これらをもとに自分たちがこれからどうしていくかを話し合いました。

- ・若者を参加させる
 - ・織田祭りやうまいもんフェスタでのイベント出店
 - ・ワークショップの開催
 - ・宣伝の仕方
 - ・特産品の開発
 - ・全国の城下町との比較
- etc...

学生が分析した柏原の問題点と課題からの意見

8月4日には、高校生とのワークショップを開催しました。

内容としては、柏原のまち歩きをし、柏原のまちがどういうものかをより知ってもらおうというものです。また、古写真を用いて現在のまちなみと比べてどちらがいいのか、今後のまちなみの保存に関しても意見を聞きました。

実施した結果、外部から柏原高校に通っている子がいたので、柏原のことをよく知らない子がいました。

ただ、まちの好き嫌いに関しては、好きな場所・嫌いな場所・好ましくない場所が結構偏っていました。

好きな場所では八幡神社、好ましくない場所では八幡神社と柏原高校を結ぶ暗い道などが挙げられました。



同時に、6月頃からまちなみの模型を作るため、建物調査のためのまち歩きを行っていました。

これは、ただ模型を作るだけではなくこの模型を使ってワークショップを開き、より客観的に柏原のまちを分かってもらうことをねらいとしています。左下が1/100サイズ、真ん中が1/500サイズ、一番右下がまちの家屋調査をしているところですが、このとき初めて模型を作るということで、すごくクオリティの低いものになってしまったのでまた、大手通りというところがあるのですが、もう一度作り直そうかという話が出てきています。



9月	10月	11月	12月	1月
模型制作 織田祭りに向けた準備（古写真・ワークショップ・KGカフェ） 建築物形状調査	11日・12日 織田祭り（ワークショップ・KGカフェ・模型） 30日 まちづくりワークショップ	7日 リサーチフェア (at 関学三田キャンパス)		29日 活動報告会
	織田祭り・ワークショップの結果分析	活動報告書作成開始	活動報告書作成 4回生卒業論文提出	活動報告書完成 3回生進級論文提出 4回生卒業設計完成

2009年後期の年表です。

10月に「織田まつり」、「うまいもんフェスタ」というものが開かれます。

そのときに、なんとか関学としてイベントをして盛り上げようということで、織田まつりの期間中「KGカフェ」という、柏原の名物を使ったオープンカフェを開くことにしました。また、うまいもんフェスタの会場では、まちなみのイメージ調査を実施しました。上がKGカフェ、下がイメージ調査の様子です。

8月のワークショップでは高校生に古写真と現在のまちなみを比較してもらいましたが、今回は、観光客や地元の人たちにも古写真と現在の写真を見てまちなみを比較していただき、好きな方を選択してもらいました。

ちなみに、このイメージ調査の時は、回答者にKGカフェの割引券を配布しました。KGカフェに訪れた人には、地元商店街で使える割引券を配布しました。

それから、うまいもんフェスタの会場とKGカフェの会場を少し離れたところにして、うまいもんフェスタの会場でイメージ調査を終えた後にKGカフェへ行ってもらい、その間もう少し柏原のまちを歩いてもらおうという意図を込めました。それでまた、そこから商店街をぐるっと回るように、回遊性を持たすように計画しました。

また、織田まつりの武者行列というものがあるのですが、そちらに学生が参加しました。

10月30日には「まちづくりワークショップ」を開きました。

これは、学生と柏原のみなさんで大まかなまちづくりのイメージを共有しようという目的で開きました。

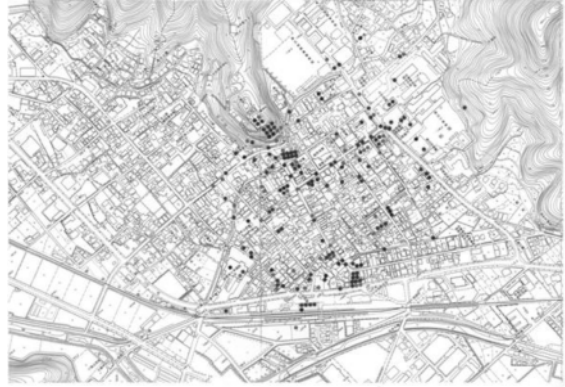
これからのまちのイメージを共有しないと、今後どのようにまちづくりのルールをデザインしていくのかが決まらないので、そのための土台となるワークショップです。

ワークショップを行った結果、歴史を活かしたい、人と人の繋がりをより強くしたいなどの意見がありました。一方で、空き家やミニ開発が目立つのでこれ以上できないように地域ルールを作るべきでないか、元々の住民と引っ越してきた人とのコミュニケーション不足が現れているのでどうにかしたいという意見もありました。

また、関学、よそ者の声ですが、星が綺麗な夜の柏原をアピールしてもいいのではないかという意見や、道が狭いのに車がすごいスピードで走るということがあり、小学生や小さい子供にとって危険なので、安全なまちづくりもしなければいけないのではないかという意見もありました。



ちょっと図が小さくて見にくいかもしれませんが、赤いマークがみなさんが好ましいと思ったところ、青があまり好ましくないと思ったところ、緑が空き家などが目立ち、好ましくないがこれからどうなるだろうと気になるところです。



11月7日には、関西学院大学の学内で「リサーチフェア」といって、今まで学生がやってきたことを発表する行事がありますが、そこに参加し、関学生に僕たちの活動をアピールするために発表させていただきました。1ヶ月ほど前にあった織田まつりの内容を縮小したかたちのもので行いました。

また去年は、都市政策演習だけでなく、角野研究室でも柏原について研究し、卒業研究、卒業制作の題材にする人がいました。たとえば、空き家の利用に関して、空き家が今のように増えていっているのか、今後どのような家屋に変化していくのかを調べたり、建築系に関する研究をしている学生は、図書館の設計や小学校の改修 小学校を地域住民や観光客など外部の人でも利用できるように工夫するなど、柏原をテーマに卒業制作をしたりしています。

4月	5月	6月	7月	8月
第一回 現地フィールドワーク	第二回 現地フィールドワーク	第三回 現地フィールドワーク	第4回現地 フィールドワーク	第五回現地 フィールドワーク
株式会社まちづくり柏原社長 荻野さんによる講義	チーム分け ●イベント班 ●アーバンデザイン班 ●ワークショップ班 ●模型班	篠山まち歩き ↓ 柏原との比較検討		

2010年度の年表です。

今年も月1回ずつフィールドワークを行ってきました。

これがフィールドワークの様子の写真です。

6月に篠山市のまち歩きを行いました。

なぜ篠山をまち歩きしたのかと言いますと、柏原と篠山は隣にあるのですが、どうしても観光客が篠山の方に行くことが多く、なぜ篠山なのか、ということを探るためです。篠山について研究し、“篠山はこうなので柏原はこうすべきだ”と柏原の独自性を見つけるためにまち歩きを行いました。



9月	10月	11月	12月	1月
第六回 現地フィールド ワーク	第七回 現地フィールド ワーク	第八回 現地フィールド ワーク	第九回現地 フィールド ワーク	第十回現地 フィールド ワーク
関学カフェ プレオープン	織田祭り ↓ 関学カフェを オープン	プレワーク ショップ開催 (学生内)	18日 ●関学カフェ ●柏原でおつ かいをしよう ●ワーク ショップ 開催予定	

2010年度の後期の年表です。

2010年9月には、10月の「織田まつり」に向けて、KGカフェをプレオープンしました。

そして、10月の「織田まつり」に2年連続カフェをオープンさせていただきました。

昨年度は、会場は関学スタジオの前の中尾ホールをお借りしたのですが、今年は規模を縮小して関学の柏原スタジオの中で開きました。

今年は住民の方からいろんな厳しい意見があり、これを機にもっと頑張らないといけないと感じたところです。

11月には、学生間でプレワークショップを開きました。

目的としては12月のワークショップ、12月18日にもう一度ワークショップを開きますが、そのときの準備、どのようにして行ったらいいのか手順を確認するため、今後の活動について具体策の提案をもう一度やっていこうということで開きました。

そして、関学柏原スタジオの模型を作ってみようと、関学柏原スタジオの実寸調査を開始しました。また、関学柏原スタジオの図面作成を除々に開始しています。

私たちの活動の反省点として、数えきれないくらいあったのですが、代表的なものを挙げました。

特に引継ぎに関して、昨年度は4回生が結構研究をしていたのですがほとんど抜けてしまい、今年は2回生の新しいメンバーが多くなったので引継ぎが上手くいかなかったところがあり、せっかく昨年やったのにまた一から説明してもらったりということがありました。これは、院生となった僕がリーダーシップを持ってやらなかったのがまずかったかなというのがあります。

また、学生をいくつかのグループに分けたのですが、情報交換が不足していました。あのグループがこれをするから手伝ってくれないか、というグループの情報交換がなかったということです。

各種制度の知識不足もあります。

そしてもうひとつ、長期休暇。

先ほどの年表でも7～8月になるとどうしても空欄になってしまい、長期休暇の間柏原にあまり学生が関わっていないという問題点があります。

この長期休暇、先ほど関西大学の出町さんが言われていたように、一週間くらい泊まって一緒に製作したりする機会を設けるべきなのではないのかという提案も最近は出てきています。

また、地域の方、まちづくり柏原、行政との関わりに関して、まだまだ学生が自分から進んで入っていきこうということ

があまりできておらず、受身な感じになっている面があります。

今後の活動予定ですが、先ほど言いましたように、12月18日に「柏原でおつかいをしよう」という、柏原の子供たちに初めて商店街を回ってお買い物をしてもらうイベントを開催します。

そのときに、親御様にK Gカフェ、親御様以外にもK Gカフェで何か情報交換をして学生と話し合ってもらおうかなと思っています。

また同時にワークショップも開き、今後の活動の参考にしていきたいと思っています。

計画中の話として、例えば、カフェも年に1～2回しか開けていないのを季節ごとにして、季節に合わせたカフェを開催してはどうかという提案も出ています。たとえば、冬でしたら餅つきしながらカフェとか、コタツに入りながらカフェとか、春でしたら花見をしながらカフェとか、ちょっと外に出てカフェを開くなどの意見が出ています。

また、長期的に続けられる学生主導のイベントの考察、長期休暇中の関学柏原スタジオの利用促進というものを、今自分たちで考えてどうしようかと話し合っているところです。

以上です。

ご清聴ありがとうございました。

(3)兵庫県立大学山南スタジオ

「丹波地域の魅力の発見と、学習・交流、情報発信」

兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師 山崎 義人

兵庫県立大学の山崎と申します。よろしくお願いたします。

二つの発表を聞いて、ちょっとまずいなあ、というのが、兵庫県立大学・私どもの直感的な感想です。

というのも、我々は関西大学さんや関西学院大学さんのように学部や大学院がある組織がスタジオを設置しているわけではございません。

私が所属しておりますのは、付置研究所である「自然・環境科学研究所」という、要は教員がいっぱい集まっている施設でございます。

「山南スタジオ」には、とある学部だとか研究室が集まって何か活動をするということではなく、どちらかと言えば、全県に兵庫県立大学の学生がおりますので、その様々な学生が山南の地にやって来て授業を受ける、その拠点である、というように最初に認識していただいて今日のお話を聞いていただけたらと思います。

(参照：パワーポイント資料...80頁)

まず、簡単に概要をお話しします。

それから、今年の8月にオープンしましたので、まだまだ活動が十分ではございませんが、オープニングの様子をご紹介すると、授業の一つであります「化石と地域づくりフィールドワーク」というのを10月から月1回、3コマ分授業して、それを5ヶ月分、 $3 \times 5 = 15$ で15コマの一つの授業にするというようなことをやっております。その中身をお話したいと思います。

それから簡単に課題をお話しして、今日の発表に変えさせていただきたいと思っております。

まず概要です。

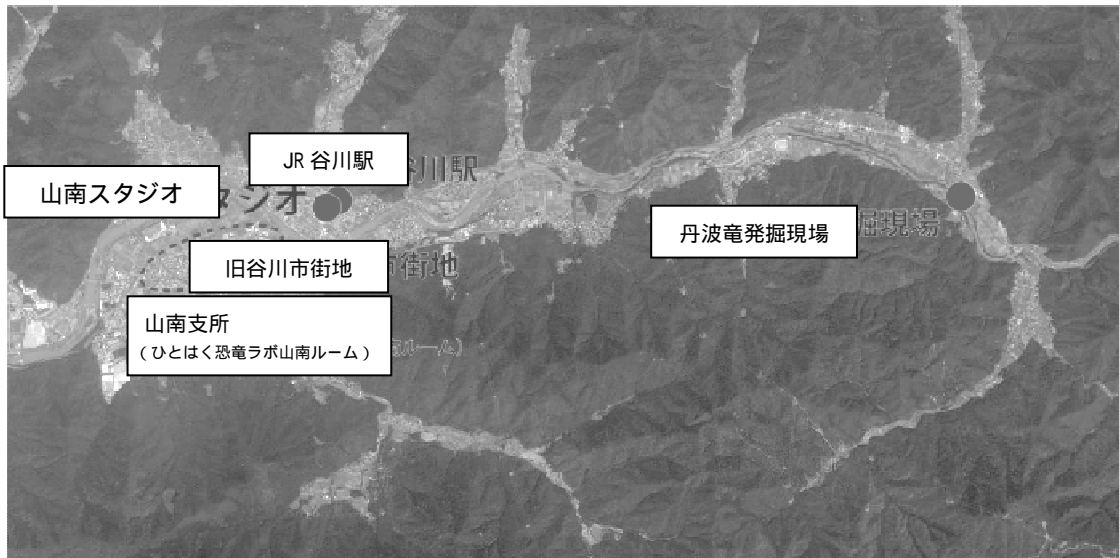
簡単な組織図をお持ちしたのですが、山南スタジオは丹波市・県民局・(財)丹波の森協会のご支援のもと、兵庫県立大学が「学習と交流の拠点」として開設しています。

兵庫県立大学は今、学長が「全県キャンパス構想」という構想を唱えており、阪神間や姫路とかに集まって授業をしているより、全県に学生が出て行って地域の方々と交流しながら、様々にお互いに学び合うというようなことをしていったらいいのではないかとということで、その一環として山南スタジオを利用・運用するといったかたちになっております。

それで、私どももその一環で、自然・環境科学研究所が運用するといったかたちになっております。

自然・環境科学研究所というのは聞き慣れないと思いますが、要は「人と自然の博物館」、みなさん化石の発掘などでご存知かと思いますが、私も人と自然の博物館の研究員を兼務しておりますので、一体となってスタジオを運用していくという仕組みになっております。

地域の方々の方も、県民局や丹波市から丹波の森協会に依頼がありまして、丹波の森協会がスタジオを設置し、私ども大学が運用するという運びになっています。



場所ですが、山南地域はこのような上空からなっておりますが、一番左手が恐竜発掘現場で、今日も発掘しておりますが、山南支所の「ちーたんの館」がオープンしたところが一番左手の赤丸ですね。

山南スタジオはJR 谷川駅のすぐ近くに設置しております。

谷川の旧市街地を山南支所と挟み込むようなかたちで設置をしております、私の勝手な想像では、せっかくちーたんの館に人が来るのですから、扇状地を下って駅まで歩いて行ってもらえるようなことが考えられないだろうかなど考えているところです。

学生が全県から一路やって来るという想定ですので、姫路方面からですとか神戸方面からでも来やすいように谷川駅の近くというところで山南スタジオを置かせていただいております。

こんな建物で、全く手も触れていないという状態です。



活動方針ですが、先ほど言いましたように、学習と交流に貢献すべく設置した施設であります。篠山層群など丹波地域の特色ある資源を活かしたまちづくりを支援することを目的としております。

いろいろ繰り返しになりますが、特に学生のフィールドワークの拠点にしたいと思っております。そして全県から学生が来てやってもらいたいと思っております。

それから、人と自然の博物館との連携によって郷土研究や社会貢献・生涯学習の拠点にも活用していきたいと思っている次第です。

先ほども少し言いましたが、「化石と地域づくりフィールドワーク」という授業を開講しております。今日も実は授業の一環で、この会場に授業を受けている学生さんが集まっていると思います。ちょっと手を挙げてもらいましょうか。はい、10人ぐらい学生が紛れています、彼らが、毎月1回授業を受けております。

今日まで様々な丹波地域の情報を彼らに提供しました。今日は化石の発掘現場を見て来たり、あとオープンしたちーたんの館などを見てきております。また、今日は4大学の合同シンポジウムの話聞いております。来月・再来月は、今まで勉強したことを踏まえて丹波地域などに提案できることがあるのではないかとということで、彼らなりに提案してもらうというような授業を展開する予定であります。

県立大学の教員が行う社会貢献の活動などにもスタジオを使っております。

それから、環境人間学部、歴史環境マネジメント研究科、経済学部などと連携しながら活動拠点を活用していきたいと思っております。

昨日から本格的に恐竜の発掘調査が始まっておりますが、すぐに昨日から発掘ボランティアさんがこの山南スタジオに泊まり込んで、発掘に対する支援をこのスタジオが担っているというようにご理解いただけたらと思います。

それでは、他の3拠点と比べるとなかなか紹介するものが少ないかもしれませんが、オープニングと授業の様子を少しご紹介していきたいと思っております。

この8月上旬ぐらいにオープニングセレモニーをしたときに、学長や県民局長・丹波市長さんに来ていただいて、また様々なゲストに来ていただいてオープニングをしました。

このように、私の結婚式をするように民家の間取りの襖を全部取ってセレモニーをやりました。

それから、ちーたんにも来ていただいて看板を披露しました。

その後、昼食をみんなでとるということで、だいたい30人ぐらいでしょうか、集まって学生も含めてワイワイと議論をしました。

もちろん、お弁当は丹波の恐竜弁当ということで食べさせていただきました。ご馳走さまです。



授業の様子ですが、先ほど移動手段が問題だというお話がありましたが、授業の予算措置でバスをチャーターしておりまして、学生をあちこちと連れ回しております。

これはスタジオで、人と自然の博物館の池田先生という方がいるのですが、恐竜化石の話を1時間半ほど、車座のようなかたちで授業をしている様子です。



それから、フィールドワークということで、山南支所から谷川駅まで歩いてどんな風にまちなみを使いましょうかということで、山南支所に集まった後、旧谷川の市街地を歩いている様子です。

こうやって見ると、先ほどの青垣の古写真のときみたいに、三角形の切妻の屋根が並んでいる様子が谷川にもあって、こういうのを上手く活かしたらいいんじゃないかなと勝手に思って写真に撮りました。



それから、これは発電所のところですね。村上茂さんに、恐竜の発見のときの様子を、学生にお話していただいている様子です。



それから青垣の方にも行きまして、関西大学の出町さんから先ほどの中身をもう少し詳しく1時間半ほどお話をいただいたというようなこともしております。

課題ということで、本当に簡単に挙げるのですが、他の拠点に比べるとやはり使用頻度が低いなど。それはやっぱり、学生自体が集中的・主体的に活動に関わるというところまでまだいっていないというところが大きいかなと思います。

それから、地元の方々との交流も、まだ始まったばかりということもあるかもしれませんが、使用頻度が低ければまだ交流もなかなか展開していないというのが正直なところだと思います。

それから、学内外での認知もまだまだオープンしたばかりで、活動も展開していかなければ認知も広がらないというのが正直なところかもしれませんが、活動を展開しながら課題を解決していきたいなと思っている次第です。

このように、様々な人が活用していく必要があるということですが、やっぱり場所を設置しても活動する主体となる人が上手く関わるような仕組みを作っていないと、なかなか使用頻度が上がらないし、交流も展開していかないと思っている次第です。

それでひとつ、今日来る間にいろいろ考えていたのですが、田舎で働きたいという農林水産省の仕組みと言いますか、補助事業がありまして、都市部の人を農村部に連れてきて働いてもらうという補助事業があります。たとえば、そういう事業などを活用しながらスタジオに常駐してもらえるようなことが、私どものスタジオだけでなく4大学が共通してできるかもしれませんし、そのようなことをこれから考えていけば、私どもも含めて各大学の活動がより展開していく可能性があるのではないかなということを付け加えて、終わりたいと思います。

ありがとうございました。

(4)神戸大学篠山フィールドステーション

「野良仕事を学ぼう、田舎に学ぼう」

／地域の活性化につながる提案づくりに挑戦」

神戸大学大学院農学研究科 地域連携研究員 近藤 史

よろしくお願ひします。

神戸大学農学部篠山フィールドステーションで駐在研究員をしております近藤と申します。

(参照：パワーポイント資料...85頁)

篠山市におきまして、神戸大学農学部では2つの農業体験修習プログラムを実施しております。

1つが「農業農村フィールド演習：野良仕事を学ぼう、田舎に学ぼう」というテーマにて活動しております。

もう1つが、地域の活性化につながる提案づくりに挑戦する「農業農村プロジェクト演習」。

この2つは、1つ目が入門編、2つ目が実践編というかたちになっていますが、今日はこの2つの演習を中心に発表したいと思います。

まず、演習の位置づけですが、農学部で平成20～22年度の3年間、文部科学省の教育GPという補助金をいただいて、「食農コープ教育プログラム」というものを実施しております。

「地域と共に育む学生の力」をキーワードに実施しているプログラムですが、この「コープ教育」というのがまず耳慣れないところですので少し先に説明したいと思います。

「コープ教育」というのは、生協のコープではなく、教室での学習と職業体験とを統合した教育戦略なのですが、これによって理論と実践を結び付ける経験を学生に提供するというものです。

アメリカで工学系の分野を中心に100年ほどの歴史がある教育手法です。

これを農学の分野に応用しようというのが「食農コープ教育」で、農学部の専門教育で学ぶ理論と、食と農の現場での実践とを統合して、その反復学習によって教育の質を高めていこうというものです。

神戸大学食農コープ教育の特徴として、食と農の現場での職業体験に加えて、農村での生活体験というのも含めていることが挙げられます。生産者だけでなく、農業を営む農家の生活者としての視点というのも含めていこうというものです。

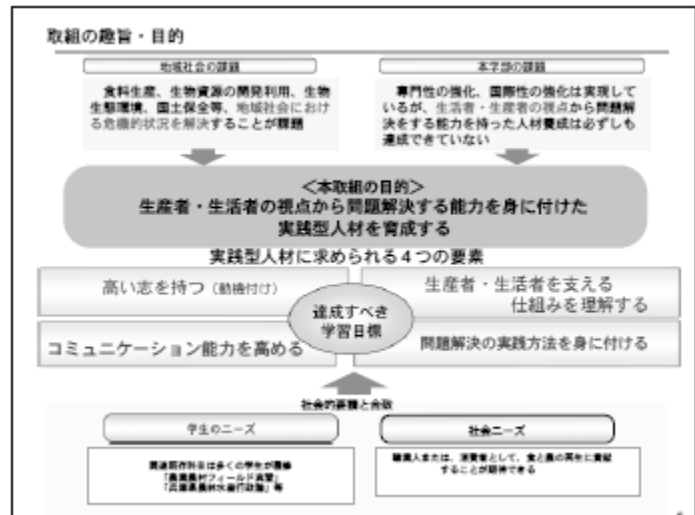
もう1つの特徴は、地域の課題解決や地域の活性化への貢献に力点を置いているということです。



取り組みの趣旨というのは、大きな目的は、生産者・生活者の視点から問題解決する能力を身に付けた実践型の人材を育成するというものですが、この背景には地域と大学それぞれの課題があります。

地域では、食料生産や生物資源の開発利用、休耕地などの農地・自然環境の保全といった課題を解決することが求められています。

一方、農学部・大学の方では、学問の専門性・国際性を非常に重視して我々は進めてきたのですが、生産者・生活者の視点から問題解決する能力を身に付けた人材育成というのにはまだまだ至っていないというところで、この取り組みを行っています。



実践型人材に求められる人材の要素として、4つのステップ:「志を高める」、「生産者・生活者の実態・経験知を学ぶ」、「生産者・生活者を支える仕組みを学ぶ」、最後に「社会実験を通して実際にやってみる」という、座学と実践を交互に行っていくプログラムになっていますが、この2つ目のところにあるのが最初にご紹介した「農業農村フィールド演習」という入門編の演習、4つ目のところにあるのが「農業農村プロジェクト演習」という提案型の実習です。

特に、篠山市を「付属農村」というように見立てまして、篠山市との地域連携協定に基づいて、生きた現場で実際にこの2つの演習を実施しています。

「篠山市フィールドステーション」という現地拠点があるのですが、ここをもとに「顔の見えるコミュニケーション」を充実させて教育を進めていくということを行っています。

私を含めて2名の研究員がフィールドステーションに駐在して、演習のコーディネートや地域の方とのミーティング、あるいは地域活動の相談に乗るようなことなども行っています。

「なぜ篠山市で?」というところなのですが、50年ほど歴史を遡りまして、神戸大学農学部の前身にあたる兵庫県立農科大学というのが、元々篠山市にありました。

これが1967年に神戸大学農学部になって六甲にキャンパスが移るのですが、農科大学の当時には、大学と地域が特産品開発でとても連携をしておりました。

黒大豆や山の芋の特産化に大学が大きく貢献をしたと、今でも農家の方から言われます。

その後、大学と地域の縁は少し疎遠になっていくのですが、平成18年に農水省の補助金をいただきまして、篠山市と農学部の主に農業経済・農村計画の研究者の間で研究プロジェクトが立ち上がりました。

これが「地域ナレッジマネジメント」に関する研究で、少子高齢化を背景に地域マネジメントや特産品生産に関わる知識の継承というのが今回危ぶまれていく中で、どのようにマネジメントしていくのかということに関する研究が、平成18年から3年間行われました。

このときに、実際にもっと現場に出て行くことを、研究だけでなく教育の面にも充実させていく必要があるだろうということで、2007年に「神戸大学農学部・篠山市地域連携協定」を結びまして、広く研究と教育の双方で篠山市に関わり、大学の研究に地域の方のお力を借りると同時に大学も地域の活性化・課題解決に貢献していこうという取り組みが始まりました。

そこから、2007年にフィールド演習、2009年にプロジェクト演習という2つの演習を開講して、現在に至って

います。

今年の夏、8月に、これまで農学部と篠山市の間だけだった大学の協定を神戸大学全学と篠山市の協定に拡張して、今後もっと活動を多岐にわたって広げていこうとしているところです。

それでは、本題の演習の紹介に入りたいと思います。

まず最初、フィールド演習ですが、この演習では、篠山市で地元の農家さんを講師として農作物の栽培や様々な村仕事を学んでいます。

今年の概要をご紹介しますと、受講生は農学部の1回生から4回生で36名、この中の大半が農学部の1回生です。年8回、日帰りで大学からバスをチャーターして篠山に通っています。

4月	里山を食べる「生物多様性クッキング」
5月	田植え、水管理の仕組みを学ぶ
6月	むら仕事の体験(草刈り・黒豆の播種)
7月	むら仕事の体験(黒豆の支柱立て等)
9月	稲収穫、米を知る(食味調査)
10月	黒大豆枝豆の収穫、調整、米販売を考える
11月	むら仕事の体験、栽培こよみを学ぶ
1月	ふり返り、交流会

今年の実施場所は篠山市福住地区という、京都府との境にある地区です。まちづくり協議会を受け入れ先として、地元の西野々という一つの集落の農家さん10家庭のところに学生がお世話になっています。

大体1家族あたり2~4名程度がお世話になっています。

演習を年8回、表のとおり活動しておりまして、写真をお見せしながら紹介していきたいと思います。

中心になっているのは「特産品の栽培を学ぶ」ということで、篠山市の有名な黒豆栽培を実際の農家さんのお宅に戸別にお世話になって学んでいます。

植付けから収穫まで、実際にそれぞれの学生が決まった農家さんのところへ行って学んでいます。

農家さんごとにそれぞれ栽培方法が違うところもあるのですが、そういう点もむしろ学生が行き帰りのバスの中でお互いの経験を交換することによって、実際の農業のダイナミズムというものを理解する意図になっています。

また、栽培技術だけでなく「地域の味・地域の魅力を知る」ということで、地元のお母さんの手作りですいつも美味しいおみそ汁やお野菜・おにぎりなどを用意していただいています。

上は枝豆を食べているときの写真で、学生が枝豆が美味しくて手が止まらないという感じになっています。

また、戸別の農家さんにお世話になるだけではなく、全員が集まって村の仕事をお手伝いするというのもやっています。

次の写真は、シカ対策のネットを張っているところです。

こういった黒大豆の栽培や村の仕事を体験学習させていただいているわけですが、地域の方からは「学生が来るだけで賑やかになる。」と言われたり、こういうネット張りにはわりと人手がまとまって要るのですが、そういうときに学生



が来てくれると一人ひとりの作業はとろくても、人海戦術で一気に仕事が片付いて助かったというようなことを言っています。

もう1つ、演習の中で田植えに関するもので「田んぼアート」というものを実施しています。これは、稲の穂が赤くなったり黒くなったりする色の付く品種があるのですが、その品種を組み合わせて田んぼに絵を浮き上がらせるというものです。

実は、これまで発表された3つの大学の方は、多分それぞれ旧町単位ぐらいのところで活動されているのだと思いますが、私たちは篠山市全域の中にひとつのフィールドステーションがあって、演習は市内を転々と回っている感じになるんですね。毎年どこかではやっているのですが、それがなかなか市全体の動きとは繋がってこないというのがあり、今年は「丹波篠山 田んぼアートめぐり2010」というのが市内6箇所で開催されたところの1つに、大学の演習としても参加させていただきました。

田んぼアートは、福住のまちづくり協議会の方・地元の小学生・篠山産業高等学校東雲校の生徒さんと一緒に田植えから稲刈りまでを行いました。申し遅れましたが、篠山産業高等学校東雲校の生徒さんとは、このフィールド演習を今年1年間ずっと一緒にやって、高校生と大学生の交流をしながら地域のことを一緒に学ぶということをしています。

田んぼアートで収穫したお米は、学生の有志の課外活動になりますが「おいし～んだい 福の神コシヒカリ」という名前を付けまして、神戸市内のマーケットなどで販売を行っています。この日はあいにくの雨だったので、ビニールの合羽の上に、サンドウィッチマンのように自分たちのチラシを貼って宣伝活動をしました。

学生の目を通して篠山市の魅力を感じ取って、それをお米の販売に活かしていくということをここでは行っています。

次に2つ目の演習、農業農村プロジェクト演習をご紹介します。

この演習は、食と農の現場で合宿をして農村地域の活性化に繋がるアクションプランを考える、それを基に地元の方々と一緒に活動し提案づくりを行う、というものです。

今年は農学部の3回生14名が受講しました。1年間の活動なので今まだ受講中ですが、1泊2日の現地合宿2回と大学構内で行う学習を6回程度組み合わせるプログラムです。今年は篠山市真南条上集落で主に実施し、プラスで豊岡市へも実習に行っております。

テーマが2つに分かれており、A班は「コウノトリ育む生物多様性の創出」、B班は「丹波の赤じゃが地域特産化の推進」というテーマに基づいて活動しました。14名の学生にあらかじめテーマを提示し、自分の受講したいものに手を挙げていただいたところ、ちょうど7名ずつに分かれて、今年の実施しました。

一班ずつご紹介していきたいと思います。

生物多様性を学ぶという方ですが、こちらは豊岡市で「コウノトリ育む有機米」というのが特産化されているのですが、同じように篠山市真南条上営農組合でも減農薬のお米づくりに力を入れています。そこで、減農薬で育まれる生物多様性をさらに活かして、コウノトリが篠山市にも飛んでくるような生物多様性を創り出そうということを、昨年プロジェクト演習を実習した学生が今卒業研究でやっているのですが、それを一緒に手伝いながら自分たちなりに地域に提案できることはないかというのを考えるのがこのプログラムです。

地域で現在休耕中の湿田(水気が多すぎてトラクターが入らないために放棄されているような田んぼ)を利用して、ピオトープを作りました。ここでは、機械が入らないので自分たちで田んぼに入って足踏みをする、草をどんどん水の底に踏みしめていって湿地を作り出すというものです。足跡の深さの違いや踏みしめ方の違いによっていろんな生物環境が出来上がり、多様性の豊かなピオトープが作られるというものです。

実際にピオトープを足踏み代掻きで作った後に、生き物調査を実施しました。

また、生き物調査で分かった生物多様性を安心安全ブランドのお米のPRにもっと活かしていくということを考えて現在、生物多様性を指標にした稲作の栽培暦、「生き物暦づくり」というのを実施しています。



ビオトープ田づくりのときの写真です。左がみんなで足踏み代掻きした後の写真です。全身泥まみれになって、足を取られて頭から転んで泥まみれになるような実習です。最初は「うわ〜」「気持ち悪い」とか言っている学生も、だんだんヌルヌル感が気持ちよくなってきたとハマるような活動で、ただ足踏みをするだけではなく、せっかくなので泥だらけになってバレーボールをしようと遊びの要素を取り入れながら実施しました。

あとの2枚は生き物調査をしている様子です。中央が草刈りをしながらそのとき出てくる昆虫を見ているというもの、右がモデラートと言って50cm四方くらいの正方形の枠を作ってそれをポンと投げ、その中に生えている植物を数える、どんな植物がいくつ入るかを数えるという調査をしている写真です。

こうした活動を通して分かった生き物を、暦に落としました。

今農家の方が使ってらっしゃる稲作の栽培暦はとても味気なく、何月何日ごろに苗を移植してそれから何十日後に次はどうして、追肥をするならこの時期で、というのがこと細かに書いてあるのですが、もっと地域らしさを出すために、「ちょうど田植えの時期にはこんな鳥が鳴いています」ですとか、「この花が咲き始めたら田んぼに水を入れます」という生物指標を使った暦を作っているところです。残念ながら、今年の活動だけはこの暦は完成しそうでないので、また来年以降も継続して次年度の学生にこの活動を引き継いでいってもらいたいと考えています。

この活動を通して、地域の方に実際にどんな時期にどんな動植物を確認・見たかというのをヒアリングして回っていますが、地元の方にも地域にある動植物資源の確認と、最近30~40年の農業の変化によって実際にそういった資源の分布がどう変わっていったか、どこに行けばまだ見られるのかということが、知識が発掘されていく機会になっています。

次に、2つ目のコースの発表です。

こちらは農家レストラン、「丹波の赤じゃが」という赤じゃがを使った農家レストランを実施しました。

演習のテーマは、赤じゃがのPRとその食べ方の提案。またコミュニティービジネスの1つの実験的な取り組みとして農家レストランをやるというものです。

「丹波の赤じゃが」は昨年発売されたばかりなので、まだご存知ない方も多いかと思いますが、真南条上営農組合と神戸大学がコラボレーションして作った、新しい特産品です。赤い皮をしたジャガイモで中身は黄色く、栗のようなホクホクした甘味と食感が特徴です。

元々、神戸大学農学部の教員がこの品種を開発していたのですが、「味はいいけど作りにくい」という問題があり、長い間なかなか世に出ていなかったのですが、最近になって別の教員が新しい栽培技法を開発し、その普及のために地域・農家のパートナーを探していたところ、ちょうど営農組合から「新しい特産品になるようなものはないのか」と相談を受け、大学のシーズと地域のニーズが合致するかたちで共同の商品開発が始まったものです。

この「赤じゃが」の味をPRする　まず食べて知ってもらおうということで、今回営農組合と学生が共同で農家レストランを実施しました。新聞記事にも取り上げていただきまして、100名限定開催、1日限定で100名オンリーの開催

だったんですが、満員御礼となりました。

このレストランでは、ひたすら「赤じゃが」づくしのコース料理を用意し、プラス、サプライズで地域の味というのを用意しました。

このレストランをきっかけに、地域の人や物といった資源を発見・活性化というものができています。

まず、お料理に営農組合の女性部の方々に非常に活躍していただきました。この女性部というのは、「赤じゃが」の栽培をきっかけに昨年営農組合でできたばかりの組織だったのですが、オープニングセレモニーではないですが、一躍活躍する場となりました。

また、レストランの設営や当日のお客様の誘導などで、営農組合の若手の男性が活躍していただきました。

それから、お料理を提供するときに、みなさんの農家の蔵に眠っている古い和食器を出していただいたり、地元の器用な方に手作りで竹の器を作っていただいたりということも行いました。

今、3つの演習をご紹介してきましたが、この演習を通して「村の教育力」のもとで、学生が農業に実際に携わらなくても別の方向から農業・農村に関わっていきたいというように、地域・農業への関心を育むことができました。

次に「地域の活性化」ですが、地域に眠っている人や物といった資源を再発見する、またそれを発信するという機会になりました。

そして最後に「相互の学習と価値創造」ですが、演習を通して大学の学生と農家さんのそれぞれ意見が食い違うことも出てくるのですが、そこを通して逆にお互いの理解に繋がりますし、そこから新しい発想が生まれるチャンスになったりということが起こっています。

課題として残っているのは、こういった演習が終わった後、学生がなかなか継続的に地域と関わるサポート体制がまだできていないことです。

現在は、バスで学生が演習のときは大学からフィールドまで行くのですが、その演習のバスがなくなってしまった後、地域の方が学生に声を掛けてくださったときに、交通をどうフォローしていくか、あるいは学生と地域の方のコミュニケーションをどうフォローしていくかというところに、フィールドステーションとしては力を入れていきたいというように考えています。

それからもうひとつ、実はあまり学生にフィールドステーションが活用されていないというのが密かに隠れた課題だと、私は駐在員として思っておりまして、篠山フィールドステーションは篠山市役所のすぐ南側にある市所有の建物を貸していただいているのですが、どうしても街中にあるので、農学部の学生が実習に来る農村からは離れている、距離があるんですね。普通の演習は農家さんのところに行って行いますので、演習自体の拠点は地元の公民館とか営農組合の施設をお借りするというかたちになり、学生がフィールドステーションに来るのは、演習期間の最後の発表会のときが一番大きいんです。それ以外は、フィールドステーションは主に卒業研究や修士論文を書く学生の拠点になったり、篠山で研究を行う教員の拠点、あるいは演習調整の打ち合わせの拠点、大学と地域と一緒に交流活動する、そんな市民の方の活動交流の拠点として一番よく利用されていまして、そこを学生をどうリンクさせていくのかということもこれから考えていきたいと考えています。

以上です。ありがとうございました。

8 . パネルディスカッション

「大学と地域はどう連携するか」

角野

先ほど各大学の報告がありましたが、他大学の活動内容をまとめた情報として聞く機会はなかなか無かったと思います。そういう意味では皆さんにとって刺激を受けられたのではないかと思います。

進め方ですが、大学の方から順に感想なりご意見を頂戴する、それから地域の方にご意見、ご感想をお聞きします。その後、フロアーからの意見があればお聞きし、後半はそれも踏まえて、フリーに意見交換したいと思います。それでは、順に、関西大学の江川先生から、よろしくお願いします。

江川

4つの大学の活動報告を聞いていて、すごくバランスがいいですね。皆さん熱心に色々なことに取り組みされていて、感動しました。

私たちは建築学科なので、空き家のリノベーションとか、まちについて考えるのは日常のことです。だけど、問題は決して建築の設計とかデザインとか、そういうことだけではない。それを大学の建築の授業の中で知るの難しいというか、口で言われるだけでは理解できないところがある。私たちが最初丹波に来た動機はここにありました。

都会でリノベーションをするのと、ここ(丹波)でリノベーションをするのでは一体何が違うのか。ここでのリノベーションの仕方を考えるということが、この地域を考える、あるいは日本の国土を考えるそもそもであると。建築とか都市を考えるときには、その方が重要なのに、20世紀の技術教育というのは、そういうことをないがしろにしてきたということですね。それを何とかしなければいけないと思っていたところにたまたまいきっかけがあって、私たちがここに関わらせていただくことになったわけです。

学生に話をしているのは、大学では、何かを教わってから、考えると言われるわけですが、現場ではそうではなく、順番を変えようということです。何も言われなくても、まず自分で、感じ、そして考えるということですね。それがフィールドでの一番のやり方だと思います。

それから、今日は色々なジャンルの報告がありましたが、学生にとって一番重要なのは、日本の国土を知ることです。どんなジャンルを勉強していても、最終的にはそこに行き着かなきゃいけない。今日は大学と地域の連携がテーマですが、皆さんお聞きになって感じておられるように、必ずしもそれだけではないですね。日本の国土というのは地域と地域が連携して作られていますから、地域と地域が連携するということが実は一番重要です。

そして今日のシンポジウムの一番重要な次の展開として、大学同士の連携。すでに報告の中で何人かが仰っていましたが、そこに大きな可能性を感じています。あるいは、我々のような総合大学だと、大学の中での連携が全然取れていないんですね。本当に縦割り。こういう活動をきっかけに、逆に大学の中も活性化していきたいですね。

課題としては、先ほどあった交通費の問題。これが何と言っても大きい。皆さんと議論する中で、可能性を見出していきたいと思います。

客野

先ほど江川先生から建築学科についての話がありましたが、我々の大学は総合政策学部で活動しています。なぜ総合政

策学部に声がかかったかという、恐らく一番近いという、距離的なことが一番大きかったのではないのでしょうか。総合政策学部のある三田と丹波では、車で一時間かからないほどの距離ですから。しかし、近くて遠いんです。三田に通っている関学の学生たちは、丹波のことをほとんど知りません。ひょっとすると三田のこともあまり知らない。そういった学生に丹波に来てもらい、活動してもらおうことになったわけです。

当初から角野教授と私で申し合わせていたことが一つあって、それは“教員は黒子に徹する”ということでした。大学とは、高校までと違い、答えのないものに向かってアプローチし、答えを見つけることはできないかも知れないけれど、答えに近づくアプローチを学ぶ場であると思うからです。これは大学の教室の中ではなかなか学ぶことが出来ないんです。生きたものに触れ、課題を見つけ、魅力を見つけ、魅力を伸ばす、あるいは課題を解決する方法を学ぶ。それができるのが、まさにフィールドワークであり、ここ柏原ではないかと思っています。

学生達は、自分たちで課題を見つけ、方策を練って、イベントのプランニングをしてくれています。もちろん地域の方の支えがあってこそできることですが、学生にとって、自分達で考えたことを、責任を持って運営し、その結果、わずかでも地域に還元することができれば、それは何事にも代え難い財産になります。総合政策学部は多種多様な分野を専門とする教員、そして多種多様な関心をもった学生が集まってきます。都市、建築に進む学生は勿論、哲学、経営、国際関係...様々な分野に進む学生がいます。ここで学んだ内容が直接それぞれの分野に生きるかわかりませんが、どんな分野においても、ある課題に直面し、それを自分なりに解釈し、アプローチしていく、あるいは社会に出て、自分で何らかの答えを出さなければならない場面において、きっとここでの経験が役に立つと信じていますし、それを与えてくれるのがフィールドワークだと思います。

田原

我々の活動はやっと始まったばかりなので、これからどう動いていくか申し上げるしかないのですが、この先の進め方によって、どういうものが待っているのかというのは、他の3大学の発表を聞いて、かなり見えてきました。

客野先生もおっしゃったように、大学にとって、地域の教育力というのは大変得難い物だと思います。県立大の演習には工学部、理学部、様々な学生が参加しています。それが地域とどう関係するの？と学生が思ってしまうばそれで終わりのわけですが、実際は自分のため、同時に自分が所属する社会のためにやっているんですね。普通の大学の授業の中ではなかなかそこに気づかないだろうと思います。学生が地域に入ったからといって簡単に気づくことではないかも知れませんが、地域に入ることが糸口となって、仮に100人に1人であっても受講生がそこに気づくことが出来たのなら、それは大学にとって素晴らしい財産であると思います。後ほど交通の問題も含め、様々な課題が提起されると思いますが、それを除いても素晴らしいものがあります。

一方、地域の方に何をお返しできるか？それは我々の大きな課題です。

丹波地域で、神様の恵みか地域の方の日頃の行いか、恐竜の化石が見つかったわけですが、私や山崎先生は県立大学の教員であると同時に、人と自然の博物館の職員でもあります。つまり最初は研究のためにここ(山南)に入ってきたんです。地元の方に色々な便宜を図ってもらったり、ボランティアで参加していただいたり、数々の恩恵を受けながら研究を進めてきました。そのお返しに、博物館として、地域内外の方々に恐竜に関する色々な知識を提供する、いわゆる社会教育は、すでにやっています。ただ、地域の活性化という観点で捉えたとき、大学の持つ学生という資源がないのがネックでした。学生に関わってもらって、もう少しそこに展開が出来ないか、つまり化石の発掘だけではなく、地域の方が願っているような恐竜化石を契機とする地域の活性化のためにお手伝いしたいと考え、山南スタジオを開設したわけです。

志は非常に高いのですが、色んな課題に直面していて...後ほど詳しく述べますが、ともかく地域に入ることが出来たのは大学にとって非常にラッキーでしたね。そして今日、他の3大学の発表を聞いて、今後の可能性のイメージーションが少し得られたと思います。

内平

うちは農学部で、農業農村の再生に一番に取り組まなければならない学部です。しかし実際に学生のほとんどが都市住民で、かつ研究分野も遺伝だとか、農業農村に貢献しない状態がかなり長い間続いています。そこで、まずは学生達に農業農村を知ってもらおうと、できるだけ色んな環境を作るサービスを提供できるよう(サービスラーニングという)にプログラムを進めています。ただし、農学部として、学生が地域に入ることだけで地域が元気になるとは全く思っておりません。例えば、自由貿易の問題ですとか、今年は気候の変動も問題でしたし、今までの農業のやり方を守り続けるだけでは、新たな地域の元気にはならないというのが、最近特にフィールドに出てわかってきています。そのあたりを、色んな専門家を結び合わせながら、新たな可能性を示すべく進めています。

今日は学生の視点のみの発表だったと思いますが、なぜかという、補助金の関係上、学生の教育の分野には補助金がついたのですが、研究の分野にはそういう補助金がつかなかったんです。本質的にはもっと本来的な地域の課題に、もっと農業農村が元気になるように、踏み込んだ地域連携をしていく必要があるというのを強く感じています。それを実際どうやっていけばよいか、今後の展望については、また後ほど話をしたいと思います。

角野

ありがとうございます。4大学それぞれの立場でお話し頂けたのかなと思います。では続いて、地域の立場から、自分の地域だけでなくよその地域との関わりもお聞きになったうえでのご感想を頂戴したいと思います。では、左側、足立社長からお願いいたします。

足立

2006年に学会コンペが私たちの住む佐治を舞台に開催され、関大の学生が提案した案が丹波市長章を獲られた経緯から関西大学、学生との関わりが始まってちょうど4年になりますが、どこにでもあるような過疎の町に、江川先生のご指導のもと、常に学生がいてくれる、また関わってくれているというのは、本当に奇跡的なことだと思います。最初はどうしても、地域の人にはそういう経験がないから、学生達が常に町を歩いていることに違和感があったと聞いています。しかし、学生が夏休みなどに大勢来てくれて、地元のお祭りや地域の草刈りなどを積極的に行っている姿を見ていると、地域に認められ、色んなところで学生が地域を巻き込むような事例が出てきたと思います。私が特に、学生が地域に認められていると感じたことですが、昨年来、秋のお祭りの神輿を学生達が担いでくれています。地域の中にはなかなか担ぎ手がいなくて、本来なら氏子でなければならないという規約がある中で、地域からのクレームもなく、学生達が神輿を担いでくれているというのは、本当に学生が地域に認められた証ではないかと思います。

また、現代GPの事業期間が終わり、予算もなくなって、これからが正念場というところですが、佐治には出町研究員が週の半分くらいスタジオに駐在してくれています。おかげで大学からの情報や地域からの情報が伝わりやすく、共有できるものになっています。これからも関わり続けていく中で、彼は非常に大事な存在だと思っています。

荻野

まちづくり柏原が第3セクターとして株式会社を設立して今年で11年目になります。また、法改正があり、新たな(中心市街地活性化)基本計画が内閣府に認定され、今2年目であり、古いようで新しい会社です。

4,50年前の柏原は商売人にとって非常に暮らしやすいまちでした。また、国・県の出先機関があり、地方の中核と言われてきました。そんなまちが今だめになっています。それを活性化するとか、商売しやすいまちにするとか、こういうのを全て私たちが担うわけではありません。私たちは、古民家を改修して人に貸したり、直営の店舗を運営したり、将来的に貸す意思を持った貸し主と話をして丹波で商売をしたいと手を挙げた人の手助けをする、これを主に担っておりま

す。他に、まちを綺麗にしたいとか、まちの雰囲気づくりはまちづくり協議会が担い、街なみ環境整備事業によって、今年を入れてあと2年、ファサードの修景をしていきます。そして賑わいづくりは商店連合会、スタンプ会や観光協会が主に担ってくれています。ですから私たちは決して万能ではなく、限られた時間と能力の中で何ができるかを常に意識してやっています。

関学が来てくれるようになり2年目になります。私たちが事業をやっている時に常に思うのは、今のままでいいのか？どこか間違っていないか？ということです。独りよがりになっていないか、これは外からどう見えているのか、常に心配しております。田舎でまちおこしをしていると、“こういうもんや”というイメージが出来てしまっていますから。そこで学生が改めて柏原のいいところ、行きたいと思うところを分析してくれると、地域の方の認知度が高まったり、忘れていたことを思い出させてくれることがあります。ただ、我々がどこかとコラボをするときには、一年中めいっぱいできるものと思っておりましたが、学生たちのエンジンがかかるのが5月頃で、1月にはもう授業が終わってしまう。そんなことも1年目には学びましたね。また、関学の角野先生、客野先生、今年は法学部の山下先生にも関わっていただきましたが、先生方には授業があって、ゼミを持っておられて、その上柏原も、ということで非常に自分の時間が少ない中でやっておられると感じました。

それから商工会、自治会、観光協会、行政の足並みが非常に揃ってきたと感じています。私は外から来られる方にも、柏原はこの2、3年で成長していますよ、と常に言っています。偉そうなことは言えませんが、着々とやっていきますのでみなさま応援よろしくお願いします。

村上

山南地域では、2006年8月、ちょうど4年前に国内最大級の恐竜の化石が見つかりました。4年前、私が最初に見つけて2日かかって取り出したものが最初何か分からず、人と自然の博物館に持って行って、三枝先生に鑑定してもらったところ、恐竜の肋骨の化石だとわかったのが始まりです。「丹波竜」のスタートが、我々地元と博物館とで同時にできたということで、強い因縁を感じています。

化石発見当時、多くのマスコミから取材に遭う中で「恐竜化石が出てきて、今後まちをどうしていきたいですか？」という質問を受けました。私はとっさに「高齢化の進んだまちに何とか活力を取り戻したい。その活動の材料として丹波竜が現れてくれたんでしょう」と言ったんです。それから今まで、順調に恐竜の発掘調査が進み、体長15～6mの恐竜の骨が、30%ほど現れています。しっぽから頭までかなりの部分が出ているこの貴重な資源をもとに、役割分担として、研究は博物館の先生方にやってもらい、私たちはそれを活かしてどうまちづくりができるかというところに取り組んでいるわけです。

おかげで、人口1600人ほどの町に、約8万人の人々が来てくれるようになりました。私たちは来てくれる人におもてなしするという精神で、自分たちの手づくりで色々やってきました。発掘現場には、子供達に恐竜の大きさを感じてもらおうと、延べ150名のボランティアを集め、等身大の木製モニュメントを1ヶ月余りで作りました。子供達は感激してくれています。始めは、観光バスでやって来てわずか5分、10分の滞在時間で去ってしまっていたお客さんが、今では化石の体験教室を開催し、月に600人ほどの子供、大人に利用していただくなど、滞在時間が30分、1時間と延びてきました。また、延びてきた滞在時間の中に満足度を提供するため、「恐竜焼き」というお菓子を作り、特許を取って販売しています。

将来は、この山南地域を、私たちの自慢である自然・環境から子供達や大人が学び取れるような、学びの場として位置づけたいと思っています。今回、県立大の自然・環境科学研究所と一緒に地域づくりに取り組めることとなり、願ってもいないチャンスであると、大きく夢がふくらんでいます。

私たちに出来ることは限られていますが、恐竜が幸いして様々なオファーも頂いています。例えばある企業のボランテ

ィアグループから、地元の方と協力して地域をもっと綺麗にするために協力しましょうと申し出を受けたりします。「協働」ですね。さらに、子供達に山や川に入ってもらって、本当の自然を学んでもらう、また、環境問題について、恐竜がいた時代と現在では環境がどのように変わってきているのかを、子供達に伝えていけるような場所になればよいと思います。「協働」と申し上げましたが、私たちはもう一つ「協学」という、協力して学ぶということを教えていきたいと思えます。また、お年寄りの方にも自然の大切さを改めて認識してもらえよう、子供達との橋渡しとしての役割を学生達に期待したいと思います。

土井

篠山には小学校区単位にまちづくり協議会があり、校区ごとのまちづくりを自分たちで考えていこうという組織で、私の住む福住にもまちづくり協議会があります。今日は丹波市の方が多いので、また学生さん達はご存じないと思いますので、そもそも福住ってどこか、分かりやすく言うと、兵庫県、大阪府、京都府の3府県境にあるまちです。

福住に神戸大学の方から声がかかったのは2年前のことで、自治会長のところに「まちづくり協議会のホームページを作らないか」と言われたのが始まりでした。自治会の役員はホームページどころかパソコンも使えないという人ばかりで、若手に仕事が下りてきました。地区内の19の村から、20代から50代までの若手が50代は若手とは言わないかもしれませんが、それぞれ集まって、ホームページを立ち上げようとしたのですが、どうしたらよいのか分からないので神戸大学の先生に聞いてみようということになりました。都会は人と人の付き合いがあまりないと言いますが、田舎も実はないんですね。隣の人くらいはわかるのですが、隣の村になるとどんな行事をしているのかもわからない。それをホームページに載せたらよいのでは？というところから始めました。それから、こんなことも出来ないか、あんなこともできないか、というのが出はじめました。事が順調に進みだした頃、このとき集まった若手のグループに名前をつけよう、ということになり、生まれたのが「2030プロジェクト」です。今年が2010年ですから、2030年には今年生まれた子が成人式を迎えます。その時に、福住に住み続けてもらえるようなまちづくりを地域で考えようというものです。で、2030年には人口を倍増させよう、と。今、非常に人口が少ないので、これを維持していこうというのはよく聞きますが、我々はそれを倍増していこうではないかという、夢のあるプロジェクトです。先ほど発表していただいた近藤さんも2030プロジェクトの一員として活動していただいています。この4月から農業農村の演習でお世話になることができ、何ができるのかわからなかったですが、まずはやってみましょうということで進めています。

ここで、私が口で言うより実際見てもらったほうが分かりやすいと思って、活動の様子の写真を何枚か持ってきました。

何でも食べられるよということで、野の花を摘み、雑草でも食べられるというのを神戸大学に教えてもらいました。

次は天麩羅にしている写真ですね。人間、食って非常に大事で、それまで学生をゲスト扱いしていたのが、一緒にご飯を食べることによってすごく仲良くなりました。

次が田んぼ。私の家で田んぼを持っているのですが、その田んぼに米を作ろうと。先ほど紹介があった、田んぼアートをやってみようということで、地域の子供やお年寄りが見に来ました。先ほども言ったように、福の住む里にちなんで、福だるまの絵です。

次に、うちでは毎年夏祭りをやっているのですが、今年は神戸大学も入っていただくということで、農学部の学生ではないんですが、学生がチンドン屋をやっている写真です。やはり若い人にやってもらおうと多くの人に集まって頂けました。

つぎは農学部の子がかき氷をしているところ、

最後が稲刈りをしているところです。

角野

ありがとうございました。

会場から 1

少子高齢化、田舎の活性化、田舎の経済衰退の問題の一番の原因は田舎に若者がいないことだと思うのですが、どうして田舎に若者がいないかというと、安定したインカムがないからだと思います。足立さんや荻野さんにはそういうインカムがあるから戻って来られたと思うんです。どうすればそういうインカムがもたらされるのか、大学の先生方とみんなが一緒になって考えればよいと思うのですが、提案が出されたとして、実際若者がそれで将来帰って来れるか。帰って来なければ提案としてあまり意味がないように思うのですが。いかがでしょうか。

会場から 2

先ほどからのフィールドワークの話聞いて、すごく感心しました。先の方と重複するのですが、情報収集し分析し、提言する、地元の方でもできると思えたのが神戸大学農学部的事例で、あとは実施者が誰になるのか少し見づらいのかなと思いました。例えば学生さんが一緒になってやっていくとか、今のところそういうものでもないのかなと感じました。そのあたりをこれから詰めていっていただきたいと思います。

角野

今の2人のご意見も踏まえて、こういった連携活動には様々な課題を抱えていて、それを分かったうえで試みているわけですが、残りの時間は再度、大学の役割は何なのか、そしてその成果を地域にどのように受け止めていただくか。また、発信のしかた、発展・継続の問題。これらについて、ここから自由にディスカッションしていきたいと思います。

客野

実施者が見えないというご質問に対して、開学はまだ活動が始まったばかりで見えにくいというのもあるかもしれませんが、一つはカフェを今までに4回くらいやっています。去年と今年、織田まつり・うまいもんフェスタの日にカフェを開いたのですが、目的の一つは、せっかく来てくれた観光客が行列だけ見て帰ってしまうと聞いていたので、もう少し滞留してもらえないかということ。もちろん、運営に関してはたくさんの方からアドバイスを頂き、バックアップしていただきましたが、資材調達やウエイターまで、全て学生がやりました。余談ですが、当日は私もウエイターを手伝わなければならないくらい、人手が足りない中でやっていました。他に、ワークショップを開催したり、地域の夏祭りに学生が着ぐるみを着て参加したりしています。なかなかシステムティックには動き出していませんが、単発では学生が汗をかきながら活動しているのではないかと思います。

もう一つ、インカムについての質問がありましたが、これは非常に難しく、かつ本質を突いた質問だと思います。これについては、日頃から学生を含め議論しているところで、なかなか答えが出ないのが正直なところです。しかし、地域に対する愛着というか、地域で色々なことが起きている、様々なプログラムが展開されている、ある種の原体験に似たものができて、そこから地域に対する愛着が生まれ、将来地域に帰って来たいという思いが芽生える。かなり長期的ではありますが、そうなれば、我々が少し関わった甲斐があるのではないかと思います。

江川

今日はわりと学生が地域にやってきて何をしたかという報告だったかと思うんですけど、実は大学と地域の連携は必ずしもそれだけではないですよ。例えば学生が地域の本質というか、地域がどういうところかというのを、地域でないところ、例えば都市部とかそういうところに伝えるというのも実は重要な事かなと私は思います。例えば、私たちは建築学科ですが、今年も大阪の団地を学生が自分たちで改修するというプロジェクトをやりました。8つの大学の建築学科の学生がそれぞれ提案をし合うわけですけど、学生を通じて、地域に来ていない学生にも地域ってどういうところってというの

が学生たちにも伝わっています。例えば関西大学は、自分たちには地域（青垣）の立派な木があるということで、この木を使って提案をすることが出来ているんですね。他の大学にはそういう経験がありませんから、そういう日本の木を使って空間を提案するなんていうことは出来ていないわけです。逆に他の7つの大学はですね、この木は何でこんなに厚く使うんだとか、この木はどこから、どうやって手に入るんだとか、何で我々が使っていないものを君たちは使えるのかとか、そういったことに展開していく。学生を通じて、必ずしも4大学だけでなくどんどん展開していく可能性があると思うんです。学生に限らず、大学と地域が何か連携してやっていく中で、地域のことばっか考えていくんじゃなくて、地域の良さを都市部にきちんと知ってもらい、山の現状とかをきちんと知ってもらい、20世紀の近代化の中で忘れてしまった日本の国土をしっかりと認識してもらうというのを、学生達がそれぞれ学んでいる領域の中でしっかりと伝えていくのが、実は一番地域を正しく持続的な環境にしていく。青臭いかもしれないですが、私は少しずつそう感じています。

内平

結局大学が出来ることというのは、可能性を示すことであって実用性、要するにお金が儲かるとか、そういうところまで踏み込めないと思います。実際は民間の企業やコンサルタントがすることだと思うんですが、我々は、可能性をできるだけ実用に近づけるよう、うまく仕組み・枠組みを作って動かしていく必要があるかなというのは感じています。そこで神戸大学では、来年度から篠山市からお金を出してもらって、駐在員を2人雇用します。それぞれ、獣害対策と、土作りの専門家です。もちろんすぐにお金になる話ではないと思うんですが、その一歩手前の、根本のシステム作りからすでに崩壊気味かなと感じているので、そこから始めたい。つまり、可能性を実用性に近づけるため、むらづくりに参加できるような人材をうまく貼り付けていくことで、例えば、2030プロジェクトと協力してうまく知財が実用的になるような形を考えて、ビジネス化していく。こんな形がいいんじゃないかなというのを、農学部と篠山市とで協力して実験していきたいと思っています。

例えば企業の商品開発でも何でも、違う枠組みで次のことを考えたりというのがあると思うのですが、農村部にはそれがないんですね。それをこれまで大学が補完して中長期的なことを考えればそれが重要と思ったからですが、やってきました。これからは、その先の、例えば大学のコーディネーターやポスドクのような人が活躍できる環境をつくることで、一段階突破できないかなと思ってチャレンジします。ただし、我々ポスドクがそのようなことを大学の中でやり続けることによって、大学でキャリアを得ることはできません。自爆行為だと言われています。でもそこにはチャレンジすべき可能性があると思っていますし、それでもいいなら一緒にやろうよというだけの話なんです。今回大学の地域連携推進室の人を呼んだのも、そういう話をしないといけないと思ったからで、大学の制度的に、農村で新しいことに取り組んでいるような人がステップアップしていくことも必要じゃないかなと思います。

土井

大学生が来てくれてとんでもないアイデアを出してくれることがあって、それが地域にとってはすごく有り難いと思っています。地域に住む方は、都市の方にとって何が魅力が分かっていない方。福住に来てくれた36人の学生の中でも、家が農業をやっているという学生が一人いるだけで、あとは土にも触ったことがなかった。そういう子が、この地域のここがいい、あれがいいということを教えてくれただけでも、すごくニーズがわかって有り難かったです。

その中で出た話が、先ほど質問の中で、ビジネスをどうしていくのかという質問がありましたが、我々は2030年人口倍増のためにたくさんの人に住んでもらわないといけないので、働くことというのはすごく大事なんです。先日、同じ篠山市内で工業をされている方、具体的には今田の立杭で焼き物をされている方に教えていただいたのですが、彼らは今100円ショップと闘っています。自分達の作るものより100円ショップのものが多少は劣るだけけれど、消費者は絶対立杭焼は買ってくれない。それに対してどうしているかという、彼らは2つ答えを持っていて、一つはブランド化で

す。高くて当たり前なんだ、という売り方とですね。もう一つは、あの辺は家庭の3世代同居率が一番高い地域なんです、それだけたくさんの方が地域に残っているのは何か秘密があるはずだと、よくよく聞いてみたら、教えに行くこと。今の消費者って、買う物は1円でも安いものを求めるんですが、例えばワークショップをやって、みんなでお茶碗を作らしましょう、とやると、2万3万平気で出すそうなんです。それを、工業じゃなくて農業にも応用できないかなというのが、ぼんやりと大学と話をする中で見えてきたことです。客席からの答えになればいいなと思います。

足立

出町研究員から発表があったように、佐治では、来年度から「佐治倶楽部」を立ち上げるということで、会議を重ねて内容を詰めていっています。会ですから、会費も集めて、学生にも会員になってもらって、会費を納めてもらう。京阪神の方からも会費を募って、佐治のファンを増やそうと活動しております。空き家リノベーションということで、学生さんにすばらしい改修をしていただき、スタジオと本町の家という2つの建物が完成しました。それを運営・活用する、サークルのような集まりなんですが、試験的な活動でもいいし、展示、物販、カフェ、アトリエなどのをきっかけに、最終的にはローカルコミュニティビジネスの拠点になれば素晴らしいことだと思っています。関わりが始まった頃は何気ない提案だったものが、現代GPも終わり、いよいよ何かしなければということで、現実的なものとなりつつあります。我々地域の者が、まちづくりや空き家の活用と言っても、媒介とする組織がサポートしてくれないと動けなかつたろうし、きっかけもなかつたでしょうが、こうして進みかけているということは、4年間の成果ではないかと思っています。

荻野

商売をしていると、継続性、跡継ぎ、再投資の問題が必ずおこります。私たち団塊の世代は、最終的に3割程度は家を継いでいたと思いますが、今は家業を継ぐという人はほとんどいないそうですね。ここ40年くらいで商業、サービス業も含めてそういう形態が変わってきました。世の中の流れで仕方がないことですが、これだけインターネットが普及し、世界中の物が直ちに手に入る世の中で、昔と同じやり方で同じように利益をあげようというのは無理だと思います。ですから学生たちや若い人には、売り方も含めた発想、将来流行るのではないかという発想に期待したいと思います。10年ほど前からの、巨大スーパーが飛ぶ鳥を落とす勢いで建ち、地域の専門店がそれに押されてあえいでいる状況は、あまりにも今までの商売のやり方に固執しているからではないかと思います。オルモを開店するとき、元は呉服屋だった空き家をどう改装するかという議論に半年を費やしました。当時のプロジェクトリーダーだった30代の女性が、柏原高校生にこの地域に欲しいもの、必要なものを聞いたりして、イタリアレストランが提案されましたが、そのプロジェクト内で唯一料飲店と関わりがあった私だけが反対しておりました。結果、私の予想は見事に外れてしまったわけです。

オルモの件もそうですが、我々は7件ほど経営の責任を持っていますから、問題が常に起こっています。6名の社員が知恵を出し合い、一つ一つ解決しています。

村上

先ほど会場から少子高齢化による人口減少の話がありました。化石発掘現場近くに大正時代の発電所があり、国の登録有形文化財となってよみがえったわけですが、大正時代の統計を見ると、地域の人口は今とほとんど変わっていなかったんです。変わったのは人口の構成です。若い人や子供が減って、高齢者が増えている。

私は地域の新聞「恐竜の里新聞」を毎月一回、これまでに28回発行していますが、その中で最近連続シリーズとして「上久下Iターン生活」という連載をしています。若い夫婦、子供連れの夫婦にどうして丹波に住もうと思ったのかを取材しますと、インターネットなどで見て、こういう風景の中に住んでみたいという夢を達成するため、というのがありま

した。また、子供の将来を考えて、教育のために、こういう環境で過ごさせたいという人もいました。決して悲観する事ばかりではないんです。しかし、実はこうしてイターンで新しく住み始めた人々がいるという情報を、近所の人はほとんど知らないんです。地域の新聞を通じて、こんな人もいるんだというのを知ってもらうための一つのツールとして、これからも継続していきたいと思っています。

地域の活性化についてですが、私たちは丹波市の所有する土地に、市の補助をもらいながら、地域の人と協働して、活動拠点づくりに取り組んでいます。将来は、少しでも多くのお客さんに来ていただくため、また満足度を与えるため、発掘の体験をする道場や、物品販売、食、その他のエンターテインメントを提供する場所として、少しでも長く滞在していただけるような拠点づくりを考えています。そして私たちは、来年4月からこの施設を拠点に企業組合を発足させようとしています。地元で出資者を募り、現在は50人足らずですが、これから増えてくると思います。やる気のある地域の方と、少しでも収益、お金になる土壌を作ろうとしています。

自然学習、環境学習といった教育の観点からですが、今の田舎の子供達は、都会の子供達の遊び方の真似をしているのが現状です。大きくなって、さすが田舎で育った子は違うと言われるような教育を今からしないとダメです。今の学校教育の中で、先生が山や川へ子供達を連れて行くというのはなかなか難しいですが、そこで、学生達が、子供達を自然の中へ連れて行き、色んなことを体験させる手助けをしていただければ、少しずつ自然の中に子供達がなじんでくるのではないかと思います。

角野

ここで議論を少し整理しますと、大学が関わる、関わらないによらず、地域は様々な課題を抱え、また変化をしている。その中で地域の方は様々に苦労されながら、努力して活動をされている。そういう前提のもとで、大学がそこに関わっていくとすれば、何が出来るのか、何に注意すべきなのか、どこが限界なのか。そのあたりをもう少し詳しくお聞かせ願いたいと思います。

田原

皆さんおわかりのように、学生の観点からすれば、大学は教育の場ですので、個別に考えざるを得ない部分があります。我々の大学の環境人間学部の中に、「柵田LOVER's」というNPOを作って活動している人間がいて、農業を通じた交流活動をやっています。例えばそういう人間がいれば、事がどんどん進んでいきます。そういう人がいない時どうするかよりも、そういう人がいた場合を考えるのが我々にとっては重要で、その人がもっと生きるような仕組みを作ろうと考えるわけです。もしくは、そういう人間が増えるような仕組みも作れるかもしれない。今、仕組みという言葉は繰り返していますが、我々が出来るのは仕組みづくりです。先ほど内平さんが可能性と言われましたが、我々が地域との関わりを持つとき、その地域が即物的にある特定の地域だということと同時に、実はもう少し普遍的な、広義での地域という事になるわけです。

角野先生が基調講演の中で「成果は急がない」とおっしゃいました。特定の地域からすると、非常にもどかしい部分があるんですが、成果を出すためには時間をかけて仕組みをつくらなければならないんです。毎年の共通確認というのも勿論必要ですが、仕組みづくりも必要です。我々県立大学の今回の活動は、全県キャンパス構想のなかで、全県キャンパスコーディネーターという人材が2人ついているから可能になったわけです。そういう人材がいなければ、スタジオ開設や、講義自体ができなかったというわけです。このように、足りないものが見えてくると、仕組みが見えてくるんです。仕組みづくりは、最初から設計して機械を作るように綺麗に作れるものではなく、実際に動かしながら作らざるを得ません。しかしながら、課題が見えてきているということは、課題をクリアする可能性があるということです。ですから、われわれはそういうプロセスにあると考えていただくと、特定の地域に色々なことが出来るかも知れない。あくまで可能性

ですが、私はできるようになるだろうと思っております。大学とは、はっきり言って恐竜のようなものですよね。大きすぎて、しっぽの先に物が落ちてから「ぎゃーっ」と言うまでものすごく時間がかかる、あれと似たようなもので、縦割りがひどくて、行政よりよっぽどひどいと思います。そういうところを少しずつ変えながら、大学を改革するのに、地域と関わりながら大学を変えていくというのが非常に重要なことで、そういう関わり方が仕組みづくりのうえでも評価されると思っています。それがどの地域と縁を結ぶかというのはわからない。しかも、シナリオどおりにはいかない。場づくり、仕組みづくり、きっかけづくりということで、地域の方にもご理解を頂きたく思っております。目に見える成果というのも、もちろん毎年の目標確認のうえでは必要ですが、その次の課題を見つけていって、仕組みづくりにつなげていく。その仕組みは、大学だけでなく様々な主体が加わったもので、そういうものを我々は地域を媒体にしながら作っているんだという認識でいいのではと考えています。

角野

ありがとうございました。まさに今、コーディネーターに代わって田原先生がまとめていただいたわけですがけれども、私なりに、皆様のお話を踏まえて、若干付け加えさせていただきます。

先ほど申し上げたように、地域は大学が関わろうが関わらまいが、多くの課題を抱えておられる。地元の方々はその課題に対して非常に頑張っておられる。学生は、まさにそういう状況を、現場で見せてもらって、話を聞かせてもらい、勉強させてもらう。少なくとも私はそういうスタンスで学生を連れてきております。ただその過程で、我々教員やスタッフも関わるので、できることなら持っているノウハウや知識を、使ってもらえる部分があるかも知れない。そういう気持ちは誰もが常に持っております。しかし、当然専門分野によってその中身は違いますし、受け入れる側の地域によっても、立場、職種によって異なってくる。これは一回でベストマッチングになるというわけではなくて、組み合わせ、試行錯誤があろうかと思えます。このプロセスが、非常に重要なのかなと思っております。

学生は、その場ですぐに役立つかどうかはわかりませんが、江川先生がおっしゃったように、そういった活動をよそで伝える、あるいは自らの咀嚼した内容で、何か別の成果を創り出す可能性は当然持っています。そして、その一部は、卒業した後も、地域に入った経験は忘れませんから、その地域のサポーター、あるいはファンとしてつながり続ける可能性は極めて大きいと思っています。さらにそのうちの一部は、自分の専門領域として、プロへと育てていくかも知れない。というような時間経過を考えたうえでの地域への恩返しというのはあるのかなと思っております。それから、地域が学生に何かをしてもらえる、あるいは、学生が地域に何かしてもらえるという感覚では、遅かれ早かれ破綻します。あくまでパートナー関係、一緒に何かを考える、あるいは一緒に活動してみる、ということがない限りは、持続性、継続はきわめて難しいと思います。

ただし、最初に言ったように、何らかの理由で一旦活動が途絶えたとしても、そういった活動があったことによって、地域の活動が刺激を受けて、新しい活動を始め、学生なんかいなくても自分たちでやっていけるという風になるというのが、実はそれが正しいのかなというようにも思っています。

ということで、最初に話した地域と大学のシーズとニーズで効率的なベストマッチングをするだけでなく、シーズとシーズ、ニーズとニーズを組み合わせ、考えてみると、次のステップへつながるのかなと思えます。皆様のご意見を聞いて改めてそういった意を強くした次第です。

最後は私の勝手な意見を申し上げましたが、まとめは田原先生にさせていただいたということで、これで終わりたいと思います。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。

9 . 閉会挨拶

大学・地域連携 4 大学合同シンポジウム実行委員会副会長 田原 直樹

それでは、閉会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

今日は、大変多くの方に、しかも、予定の時間をかなり過ぎている中、本当に熱心にご参加いただきましてありがとうございます。大変申し訳ないことに私のところの学生はバスの都合で全員帰ってしまったんですけど、それもまた大学の現実を示しているということで。

今日は冒頭に 4 大学のトップバッターとして、最初にこの丹波地域に入られた江川先生がご挨拶されました。最後は、この 8 月に入ったばかりで、今日も本当は発言すること自体がはばかれる状態だったのですが、私どもの大学の方でご挨拶をさせていただくということです。おそらく今日の成果を踏まえて今後の抱負を述べるとかということになると非常に格好いいと思うのですが、それは言葉ではなくて実際にどういう活動をするかでお示しすることにいたしまして、色々な課題、成果もあるのですが課題もごさいます。

今日会場の方からのご意見にもありましたように、地域にとっての本質的なところに我々の活動が届くのか、そういう非常に重い問いかけをいただいております。そういうことも考えながら取り組んでいきたいと思っておりますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

色々な主体が関わっております。地域の方のご理解、ご協力、ご支援がないと進まないというのはもちろんのことですが、我々は今回のシンポジウムの実行委員会とっておりますが、結構丹波県民局とか丹波市、篠山市の手のうえで踊っているんじゃないかというのがあります。実は大学が活動するうえでは、県も含め地元の行政がキープレーヤーになっていることは間違いない事実でありまして、最後に御礼を申し上げたいと思っております。

今日、村上さんが「協学」ということをおっしゃいました。私はつい男女の「共学」の話を思い浮かべてしまったのですが、字が、協働して、協力して何かをやるという、そういう「協学」であります。そもそもこういう場を持てたことは我々にとってありがたいことでしたし、前進だったのではないかなと思います。こういう協学の場を時々開きながら、今私どもの大学は 4 番目ですが、できれば 5 番目・6 番目と続けばいいと思います。そう言いながら実は、「何で丹波ばかりなんだ」と別の県民局の方から言われたりもするので、なかなかそう簡単には増えないと思うのですが、ここにおられない大学の方、市の方が少しずつ輪の中に参入しないと、仕組みというのはなかなかできないと思うので、こういう協学の場をつくりながら、少しずつ進んでいきたいと考えております。また皆様方のご協力をいただけたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。